

能力はすなわち情熱である

尾崎 士郎



東海林太郎しやうじたろうが有名になったのは「赤城あかぎの子守唄」(佐藤惣之助作詞)ですが、尾崎士郎『人生劇場』の映画主題歌の作詞・作曲は佐藤惣之助・古賀政男です。小説『人生劇場』は青春篇へんに続いて、愛欲篇・残侠篇ざんきやう・風雲篇など全部で八篇あり、昭和八年から三十四年まで書き続けられた大作です。

士郎は愛知県吉良きらの生まれで、青年時代に生家は没落、苦勞を重ねながら早稲田大学で学び、作家を志こころざします。大正十年に時事新報の懸賞小説で『獄中より』が第二席で入選します。その時の第一席だったのが宇野千代の『脂粉しふんの顔』で、受賞の翌年より二人の同棲どうせいが始まります。

都新聞（東京新聞）に連載した『人生劇場・青春篇』が単行本で刊行されると、大正十二年に出会って以来から変わらぬ親友であつた川端康成が書評で取り上げ絶賛ぜっさんします。

川端は感動のあまり幾夜か眠れなかつたと書き「実にわが国では驚異あたいに価するまことの大小説である。比肩ひけんし得る作品は容易よういに見当たるまい」と激賞したのでした。

戦争中はペン部隊といわれた従軍作家として戦地に赴おもむき『石田三成』や『真田幸村』など歴史小説を新聞に連載し、戦記物も多く残しています。戦後、三十年ぶりに帰郷した士郎は、吉良の人びとの歓迎に涙が止まらなかつたそうです。

義理人情を肯定こうていし、素朴な人間味を追求した彼の作風は、その人生を通じて一貫しています。彼の出身地、吉良を江戸時代に治めた、吉良上野介こうざけのすけは忠臣蔵ちゆうしんくらの芝居しばいでは悪者ですが、地元では領民に慕われた名君でした。清水次郎長ごんりゆうが建立した、浪曲で知られる「吉良の仁吉にきち」の、立派な墓は香華かうげが絶えません。『人生

劇場』に登場する侠客きやうかくの吉良常きらつねは仁吉にきちの子分だったという設定です。

士郎は多くの人を愛し、愛され、また酒と将棋しょうぎと相撲を愛した作家で、昭和二十五年には日本相撲協会から横綱審議委員会委員を委嘱いしよくされたほです。

地元には生誕の地碑ちひや文学碑などが建てられ、平成十四年、新たに尾崎士郎記念館が開設されております。

※尾崎 士郎（おざき しろう・昭和三十九年〈一九六四年〉没・六十六歳）

◎ 義理人情を肯定した、尾崎士郎の作風は共感することが多いです。これぞ「日本人」と。

◎ 小説「人生劇場」を川端康成が激賞したのは本物の小説の証あかしですね。

◎ 「能力はすなわち情熱である」は名言です。

（M生）